

## ニュースレター Vol.9

2024年 5月発行

# 公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

### ご寄付くださいました皆さま

平素は、公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金に温かなご寄付をいただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

夏の装いがあちこちで見られる頃となりました。皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

私どもは、宇温(たかはる)が遺した「人からもらった幸せを その人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」という言葉を礎に 2019 年に基金を設立しました。宇温の「幸せをつなぐ」という思いに、たくさんの方からご賛同いただき、ご寄付くださいましたことで、助成活動を続けることができました。

今回、基金の活動をご報告できますことは、これもひとえに皆さまからの温かなお心の賜として、深く感謝申し上げます。

### 助成活動と助成先からのメッセージ

皆さまからいただきましたご寄付につきまして、宇温が沖縄での学生時代にかかわりをもっておりました一般社団法人 大学コンソーシアム沖縄 子どもの居場所学生ボランティアセンターさん、並びに、特定非営利活動法人 アメラジアンスクール・イン・オキナワさんに助成し、活用いただいています。

子どもの居場所学生ボランティアセンターさんでは、以前から精力的に続けられています離島への学生ボランティアの派遣に加え、新たに学生提案型企画として、沖縄の学生が交流や意見交換で京都の子どもの居場所を訪問することに助成金を活用くださいました。携われた学生の方々からの子どもの貧困問題や課題解決についての多くの学びや気づきが詰まったレポートを別紙 1 に掲載いたしました。

アメラジアンスクール・イン・オキナワさんでは、学校運営が極めて厳しくご苦労されている中、授業で使用される物品の購入に助成金を活用され、学習環境の整備に加え子どもたちの教育にも役立ててくださいました。別紙 2 では、スクールで元気に学ぶ小学生や中学生の授業の情景を紹介いたします。

子どもの居場所学生ボランティアセンターさんから、  
助成に対して、感謝状をいただきました。



## Facebook ページ

琉球宇温基金の近況などを皆さまにお知らせできるよう、Facebook のページを立ち上げております。  
現在、基金の紹介と、このニュースレターでご紹介した助成などの活動が主な内容となっております。  
不定期での更新となりますので、時折ご覧いただけましたら幸甚です。

下記 URL、または、Facebook の「琉球宇温基金」を検索してご覧いただくことができます。

<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

なお、本ニュースレターにつきましても Facebook からご覧いただけます。

## 今後に向けて

行動制限が緩和されて 1 年が経ち、これまで以上の賑わいとなる所も多くなったことに加え、持続可能な社会に向けて、従来の価値観とは異なる新たな時代へと向かう息吹があちこちで感じられます。そのような中で、これからの時代を担う子どもたちや若い世代の皆さま、そして助成先の方々が前向きにそして活発に活動されています。私たちとして、できることをひとつずつ積み上げていくことを通して、宇温が遺した言葉「人からもらった幸せを その人だけじゃなく 他の人にも幸せをつなぐ」の精神に基づき、社会課題の解決につながる活動を地道に続けてまいりたいと存じます。

今後におきましても公益財団法人みらいファンド沖縄・琉球宇温基金への温かなご支援とご協力を賜りますこと、何卒よろしくお願い申し上げます。

以上

## (別紙 1) 子どもの居場所学生ボランティアセンターさんからいただきましたレポート

「こどもの居場所学生ボランティアコーディネート事業」は、内閣府が主導するこども貧困緊急対策事業の一環で、沖縄県から委託を受けて行っており、今年度で 9 年目を迎えます。この事業は、大学コンソーシアム沖縄に加盟している 11 の高等教育機関の現役学生を県内のこどもの居場所へボランティアとして派遣し、居場所に通う子どもたちの生活支援や学習支援を行うなど、沖縄の地域課題解決を目的としています。

令和 5 年度の活動人数は、新型コロナウイルス感染症等の感染予防の観点からなされていた制限が緩和されたこともあり、年間累計 383 名（実人数 249 名）となり、派遣人数・派遣居場所数ともに増加しました。

また、琉球宇温基金を活用させていただいている離島派遣についても、夏季・春季あわせて活動人数は 49 名（実人数 32 名）となり、一昨年度と比較して増加し、より多くの離島の子ども達への支援につながっています。このように昨年度は活発な活動ができましたが、学生たちの報告については後ほどご紹介させていただきます。

さて、前回の記事でご紹介しました、学生に子どもの貧困問題に関する理解を深め、課題解決に貢献する能力を身につけてもらえるような人材の育成を目的に実施している「学生提案型企画」の昨年度分についても無事終了しました。そのうちの 1 プログラムに関しては、関西地区の学生との交流を含めている点をご理解頂き、通常の寄付とは別途の活動費助成を貴基金より出資いただきました。助成を受けることとなった「ボランティア学生交流・派遣プロジェクト」では、ボランティア学生が京都の居場所を訪問し、現地の子どもや学生ボランティアとの交流・意見交換を行いました。資金面での後ろ盾をいただいたことで、確実な計画立案・実行が可能となりました。このような条件が整うことで、企画するメンバーの士気を高め、充実した報告内容につながりました。ここに改めてお礼を申し上げます。さて、先ほど触れました離島派遣について、令和 5 年度春季（R6.2 月中旬～3 月中旬に実施の活動）から、学生の活動報告を抜粋してご紹介します。

### ◆わくわくクラブ（伊平屋）/琉球大学 2 年次 島袋真理

小学校には野球部がないとのことでしたが、皆とても上手で、そのセンスには目を見張るものがありました。初日の交流なども含め、スポーツなどで一緒に体を動かすことで自然とコミュニケーションを取ることができ、たとえそこに会話があまりなかったとしても、不思議と距離が縮まっていく感覚がありました。本島にくらべ生徒数が少ないため、子どもたちは学年に関わらず仲が良く、お互いのことをよく知っていたことが印象的でした。伊平屋島には高校がなく、中学校を卒業すると島を離れるとのこと、短い間ではありましたが、大学生のお兄さんとして、子どもたちに少しでも良い影響を与えられるようにと意識して 2 日間活動しました。この経験が、お互いにとって有意義な経験となれば幸いです。

◆エンカレッジデイゴ学習支援教室（宮古島） / 琉球大学 4 年次 花城大地

ここへ通う子ども達は本当に普通の子なのに、家庭や学校の環境のせいで勉強ができなくなってしまうのはとても残念であり、こうした居場所が宮古だけでなく本島にも多くある意味を、今さらながら私自身が気づいた気がする。

子どもたちが何を考えているのか、自分がやりたいことが何なのかを、「将来の夢は？」「学校どうだった？」など、その子の事情に合わせながら、丁寧に質問しながらたくさん話をしてもらって、聞くように心掛けた。

子ども達も最初は人見知りをしてしたが、徐々に「先生見てー！」という感じで自分達から近づいてきてくれて、いい信頼関係を結べた気がする。今いる場所が宮古という小さな島で、その世界でのいじめや家庭の事情など、一人一人にとっては大きな問題だと強く理解しているが、それでも努力することや好奇心を持つことを続けてほしい。社会人になるときや進学するときに、沖縄本島や県外に出て、今までの環境と線を引くことができ、その子の努力で結果がついてくるようになると思うから。



◆学習支援教室まなびやあ（宮古島） / 琉球大学 1 年次 椎名綾

子どもが発する言葉に乱暴なものが殆ど無いことに気づいた。私は何故なのか疑問に思い、それについて居場所の先生に聞いてみた。お話によると、子どもの乱暴な言葉は暴力などの悪い行動にも繋がりがねないため、職員同士でも連携しながらしっかりと注意することを心がけているとのことだった。今回の活動の中でも、私は職員会議にも参加させて

もらったが、そこでは子どもの家庭状況や居場所での状況などの情報交換がされていた。私はこの時まで、子どもと接している先生の姿しか見ていなかったため、支援する大人として子どもを分析する様子はとても新鮮であり、支援する大人が持つ責任の重さを改めて実感させられた。私は、卒業後小学校教員を目指している。教員も子どもを指導していく上で、その場に応じた指導や職員同士の連携が必要になると考える。

今回の経験をきっかけに、もう一度子どもを導く立場を再認識し、より良い指導力を持った教員になれるよう学び続けたい。



◆サシバ教室（宮古島） / 琉球大学 2 年次 竹中誠瑛

1 日目に代表者から教室の説明を受けた。教室の理念や通っている子どもの実態、「自分の子どもがサシバ教室に通っているのを知られたくない」「2 階の玄関にすら上がってこない」などの保護者との関わりに関する課題。またイベントと

して「本屋へ行き、自分の図書・問題集を購入」「実際に働いている人との交流」「職員・学生・外部との情報共有」「写真を玄関に貼り、保護者に見てもらう。保護者に何度でも来てもらう」など、子どもへの学びを提供・知ってもらう・



保護者への関係を良くするための工夫があった。この説明のおかげで、サシバ教室で自分がどのように活動していくか、どのような子達がいるのか、子ども達とどのように接していくかを考えることができた。

代表者からの初日のアドバイス「本気で一緒に遊ぶ」を今回は意識した。僕が本気を出すと子どもたちが不満を言うケースがほとんどで、少し加減しても楽しんでくれるが、それを気にせずやっても子ども達は勝負に燃えるということに気づかされた。普段の定期活動でも活かしていきたいと感じた。

#### ◆サンゴ学習支援教室（伊良部島）/名桜大学 1 年次 野中遥菜

今回の不定期活動が初めての活動でした。1 日目は、初めてということもあり、派遣場所に行く前から緊張し、活動中もなかなか緊張が取れませんでした。しかし子どもたちが人懐っこく、元気で、積極的に話しかけてくれる子が多かったり、私自身も積極的に子どもたちと接したり、先生方もやさしい方ばかりであったため、少しずつ緊張もほぐれて、リラックスして活動することができました。

中学生と接する時間では、高校受験期間ということもあり、勉強を教えることがメインでしたが、休憩時間にカードゲームなどをして遊ぶ時間もありました。中学生に教える内容として、私は得意教科だった数学、英語、理科を主に担当させていただき、子どもたちがわからないところがあったらすぐに対応できるようにしました。



#### ◆いそべ子どもホッ！とステーション（石垣島）/国立沖縄工業高等専門学校 2 年次 浅野光咲

初めはみんなに受け入れてもらえるか不安でしかたなかったのだが、分からない問題があればすぐに聞いてくれたり、「みさき先生と早く遊びたいから宿題すぐ終わらせる！」と優しい言葉をかけてくれたりして、ぼかぼかした気持ちになった。みんなの宿題が終わり、給食を食べる時間になったときも、「一緒に食べよう！」「ごはん持ってくるからここで待っていてね」と、どちらが先生か分からないような嬉しい



声かけをしてくれて、初めての活動がここで良かったと心から思った。また、この時はうどんをいただいたのだが、支援員の方が学校給食の献立と被らないように日々考えて作られているらしく、思いやりのこもった味でとても美味しかった。

ごはんを食べた後は、みんなで居場所を軽く掃除してから外に出て、総出で鬼ごっこをした。子どもたちは凄く足が速くてついていくのがやっとだったけれど、自分の幼い頃を思い出しながら楽しく参加させてもらった。

#### ◆子どもホッ！とステーション未来塾（石垣島）/沖縄県立看護大学 3 年次 草野志歩

「つまづいている所はある？」などと声をかけると、「ここが分からない」と教えてくれるので、問題を解くヒントを教えて一緒に解くようにした。その後は子ども達の方から分からない問題や解き方のアプローチが正しいのかななどを、その都度質問してくれた。初対面の人間に自ら質問することは難しいようだったが、こちらから話しかけると答えてくれて、また一度話すと、その後は子ども達の方から質問してくれた。

2 回目は高校受験後だったので、勉強をするのではなく、家や学校での出来事などの話をたくさんした。その中で、中学校で何らかの人間関係のトラブルを起こしても、島の高校に進学する場合、環境がほとんど変わらず関わる人達も限定されるので、閉鎖性を感じた。また、島に大学がないので大学生が身近におらず、進学イメージができていくという話を聞いて、それも離島ならではの感覚を感じた。

短い期間ではあったが、離島の子ども達との交流を通して、子どもの居場所は家や学校とは違った第三の居場所となる重要な場だと改めて実感した。離島派遣にあたりご支援くださった方々に恩返しができるよう、今回の経験や学びを今後の活動に生かしていきたい。

#### ◆南大東村立学習支援センター（南大東島）/琉球大学 1 年次 登川一花

「先生いつまでいるの？」と聞かれ「明日の朝帰るよ」と伝えると「じゃあまた明後日きてね」と言ってくれました。子どもたちのまだまだ残ってほしいという気持ちを感じました。「先生のこと覚えておいてね」と言ったら、「日記に書いておく」や「折り紙に漢字で登川一花って書いたから忘れない」などの言葉をくれてほんとに嬉しかったです。この日は低学年の子どもたちのほかに、小学六年生の子どもたちとも関わってみました。お話をしていると、どの高校どこの大学に行きたいなどをもうすでに悩んでいて、すごいなと感じました。しかし、その進路の話をよくよく聞いてみると、身近な人が行って楽しそうだからというものでした。だからこそ、他にもたくさんの道があるということをもっと知る機会があれば、島の子どもの未来も広がると感じました。この活動を通して、子どもたちに色々な影響を与えられる機会にしてあげたいと強く思い、また次回も参加したいと思います。



## (別紙 2) アメラジアンスクール・イン・オキナワさんからいただきましたレポート

長年にわたる本校へのご支援に心から感謝いたします。

今年も基金による助成金を頂き、誠にありがとうございます。

さて、本校では電子機器を活用した授業が多く、特にプロジェクターは必需品です。プロジェクターはスクリーンに映像を投影するのに使用しますが、本校では、教師が作成した資料や生徒の解答、あるいはネット資料などをホワイトボードに投影し、その投影した資料に直接マーカーで文字や絵をかき入れます。そうすることにより、子どもたちの理解は深まり、重点事項をすべての子どもたちで共有できます。

このように、プロジェクターは授業において重要な役割を担っていますが、残念ながら本校ではすべての教室に常備されておらず、授業に支障をきたすことが多々ありました。そこで今回は、本助成金でプロジェクターを4台購入し、教師が全ての教室でいつでも使用できるようにしました。

お陰様で、プロジェクター不足は解消され、すべての教師が快適に授業を進めることができ、子どもたちも興味関心をもって授業に参加しています。

また、助成金の一部で扇風機も購入しましたので併せて報告いたします。購入しましたプロジェクターと扇風機は大事に使用し、子どもたちの学力向上に役立てていきます。



中学生の地理の授業  
地図を投影し、地名や  
特色を書き込んでいる。



小学4年生の音楽の授業  
楽譜を投影し、ギターを  
練習している。



サンダンカ（琉球大学構内）

公益財団法人 みらいファンド沖縄・琉球宇温基金

〒903-0824 沖縄県那覇市首里池端町 34 2F

TEL 098-884-1123

<https://miraifund.org/kikin/takaharu/>



<https://www.facebook.com/Ryukyu.Takaharu.Foundation/>

